

がん患者さんのQOL(生活の質)向上を… 緩和ケアチームの取り組み

取材／読売新聞中部支社 前編集委員 医療コーディネーター 片岡 太

名古屋記念病院 緩和療法内科部長

がん性疼痛看護認定看護師

長尾 清治 医師
古賀 千晶 看護師
湯浅 周 薬剤師
杉山あけみ 臨床心理士



長尾 清治 先生



古賀 千晶 看護師



湯浅 周 薬剤師

名古屋記念病院(名古屋市天白区、藤田民夫院長)は、豊富な知識を持つ痛みの専門スタッフががんの痛み、いわゆるがん性疼痛に意欲的に取り組み、がん患者さんのQOL(生活の質)の向上に大きな成果を上げ、高い評価を得ている。

がん性疼痛の取り組み方などについて緩和ケアチームの長尾清治・緩和療法内科部長、古賀千晶・がん性疼痛看護認定看護師、湯浅周・薬剤師、杉山あけみ・臨床心理士の4人に話を聞いた。

Q.がん性疼痛に対する緩和ケアは遅れているといわれています。現状はどうなっていますか。

長尾部長／がん対策基本法ができたことによって、全国にがん診療拠点病院が整備され、この拠点病院では緩和ケアチームを作らなければならないことになっています。

Q.緩和ケアに関してどんなことがあげられていますか。

長尾部長／例えば、がんの診療にあたっている医師を対象に年に一回は緩和ケアに関する教育や研修を必ず開かなければならないことになっています。一方、日本緩和医療学会で、だれでもが活用できる緩和ケアのマニュアルを作成するなど全体的に見れば緩和ケアはかなり進展しています。

Q.がん性疼痛とほかの病気との痛みの違いは。

長尾部長／がん性疼痛は、かなり強く持続する痛みが特徴で、患者さんのQOLを低下させるなど、ほかの病気の痛みとは大きく違ってきます。

Q.がん性疼痛はトータルペイン(全人的な痛み)だと言われます。このトータルペインについて説明してください。

長尾部長／身体的痛み以外に心理的、社会的といった患者さん自身のトータルの痛みにかかわることを言います。従って、がん性疼痛に対しては、トータルペインを

考慮した対応が大事になります。

Q.古賀さんは、愛知県でも数少ないがん性疼痛看護認定看護師の資格を取得されていますが、がん性疼痛にはどんな痛みがありますか。

古賀看護師／がん性疼痛には、骨転移に代表される体性痛、おなかのあたりが痛いといった内臓痛、手足がしびれて違和感がある神経障害性疼痛などがあります。

Q.痛みの原因がはっきりとしない患者さんと接する立場にいただけに対応が難しいのでは。

古賀看護師／がん性疼痛は身体的な側面だけではなく、トータルペインの要素が強くなります。また、患者さんは、痛みのメカニズムを知ったうえで痛みを訴えることは少ないです。このため、看護師は痛みの病態生理やメカニズムをアセスメント(評価)し、さらにトータルペインを考慮したうえで全人的苦痛の観点で対応しています。

Q.患者さんの本当の痛みの原因を知ろう